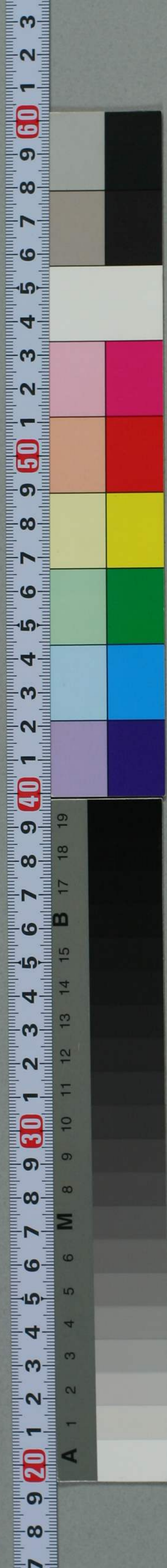


（元地）第二卷第十一号は、山彦と鷹の歌とと、西政文壇の研究と仰ふ。諸君其の氣運の一徴は数て有様。

して其範圍を擴張することの愚からず答はない、實に内容のよりのつた雑誌だと云つて、合評の考證精細を讚して、~~これ~~くれられました。文庫第二十卷第五号は、「鉛筆畫二葉、印刷の苦心察するに足る、素人の知らざる所、力痛を入れんとし、主義、要は書肆の忍耐力奈何に依りて、此雑誌の消長と見るべし」と~~附~~やされまゝだ。発行人の責任は、容易では△りませぬ。合評は「栗屋落を避くべし」とは、これは編輯の方でも、異議のあらう答の△りませぬ。同じ雑誌は、森さんと上田さんとを上げたり下げたりした、雷光とりのお方の評も有まゝだが、往自命丈の愛憎の沙汰と見受けられ様。萬籟（第二卷第七号）とりののは、大層威勢の好い雑誌で△り様。全體の評が、要領を得ざること、猶そが巻頭にある繪画と同一一般として有様が、どちらもお分りなからなかつたと見え様。自己の文章は所々一二等の數字を標して、篇尾は其註釋めきたこととと載せたるなどよ至ては、尋常一様のキサあらざるとあるのは、西洋の人名地名などを、横文で註してあるのを、お氣に障られたり存じ様。翻譯文で、西洋の人名地名は片假名を用ゐるときは、昔の假名~~文~~で、秦始皇と晋師曠とがまぎれるとりの話と同じ事で、何が何やら分らなからなもので、中村敬宇

同志文学（第百十三号）は、新聞での内閣新報に似て、内容體裁、共に誌界の覇主たるべきも、たゞ惚らばきは、我邦の如き趣味嗜好の幼稚よりて卑近なる、今日に於ては、果して斯の如きものを、能く歓迎するや否よは是なり」として居られ様。



森鷗外原稿断片



特別
文庫14
A72

木林區外原稿断片

ゆゑ著 續明治文學史上卷所収



合